

## アカデミックサービス

### ・現状について

ノートテイキングの他に音声認識についての技術が開発が進められている。それが提供されるようになれば、さらにサポートが発展すると思われる。その音声認識の利点は、より直接的な情報提供ができることである。しかし悪い点もある。話した内容がすべて情報となり、情報が多すぎて困ることにもなる。ノートテイクの場合にはノートテイカーが話す内容をまとめた提供するので、情報はすべてではない。しかし音声認識は、音声技術で話した内容が情報として変換されてしまうので、多すぎる情報ということになってしまう。10年後にはこの技術どうなるのか。

### ・アカデミックサポートサービス

#### ・指導員について

アカデミックサポートサービス、学習サービスについて話す。サポートサービスには、にはいくつかの組織がある。この組織には、サポートファカルティというものがあり、聾の学生をサポートする特別な指導者がいる部門である。そしてその指導員は、ひとそれぞれに専門的な分野をもっている。私の部門には3人の特別指導員がいる。一人はマーケティング、会計、もう一人はマネージメントや国際ビジネスである。サポートサービスは、いくつかの部門をもち、それぞれが専門分野をもつ。それらの指導員は、NTIDの中の指導員である。指導者は、ほとんど1対1、あるいは少人数でサポートをおこなっている。サポートサービスのためのリストがあり、どこに聾学生がいるのかがわかるようになっている。このように指導員は、できるだけ聾学生をサポートができるようにしている。ひとりの指導員は、2つとか3つとか、4つとか、5つとかの異なった授業を担当し、また聾学生の指導を行っている。リストの中には、ノートテイカーのリストのほか、ノートテイカーは誰か、指導員は誰かがわかるようになっている。更に指導員は、アドバイスやカウンセリングも行っている。指導員としての労力は、実際にクラスを行っている先生とより協力的に行っていくことである。実際に聾学生が、受けている授業の教員と良い関係をもつことが大切である。聾学生を指導する人たちは、聾学生の指導もあるが、実際にクラスを教えている教員たちへの働きかけを行っている。リエイゾンのサービスがあるが、クラスを教えている教員たちへのサービス、働きかけ、役割を担っている。

教員の中には、聾学生を初めて受け持つ人もおり、聾学生とどう接していいのかわからない教員もいる。こうした教員に対して働きかけをしていかなければいけない。教員も聾学生をどのように教えたらいいのかわからなければ、オンラインでコールアクトというサ

イトや、クラスアクトというサイトがあり、それにアクセスして、私たちとコンタクトをとることが可能である。その他にも分野がいろいろあり。教え方やコミュニケーションの取り方などができるようになっている。このように指導員が教員を指導する。

昨日、NITAC と PEPNet について話を聞いた時に、インフォメーションシートに関して話しを聞いたと思うが、NTID もオンラインシステムでファカルティに対して情報を提供できるようになっている。もちろんこの情報は、聾を担当する NTID の教員だけではなく世界中からアクセスがあり、聾者への教育の情報を得ている。PEPNet の人たちもこのウェブサイトを通じて、小冊子、ガイドブックを作り日本や中国、ロシアなど世界などへ提供する事業を行うようにしている。PEPNetJAPAN ができ、ウェブサイトが完成すれば世界中に提供は可能となる。ウェブサイトの中の情報はプリントアウトもされて提供できる。

## 2. サポートの成果について

IMPORTANT BENCHMARK : NTID の 86% の学生が次の学期も大学に残り、長期休暇後も大学に戻ってくる。また 68% の聾学生は学士をもってしっかり卒業している。健聴学生は 60% が卒業しているが、聾学生の方が多い。

誇りに思うことは全米一般の聾の学生の卒業率は 25% になっているのに対して、RIT は多くの学生が卒業している。これは誇りである。

この数字は、いままで 2 つのサポートが学生に反映されている証拠である。どのように RIT に入学できるのか。RIT に入学できる条件は、聾学生も同じである。全国テストがありその結果である。高校時代にとった成績表なども関係する。その他に高校からの推薦書などを見て学生にあったところに配置するようにする。

## 3. 履修方法について

学生の入学レベルは 3 つあって、学士レベル、準学士レベル、学士コースに編入のための AAS (編入学) コースがある。入学した学生の中には、夏に特別なコースに参加をすることが必要な学生もいる。入学許可を得た学生は RIT の 3 つのいずれかに配属されるようになっている。たとえばアメリカには ACT 試験と SAT 試験の 2 つの試験がある。そのうちの 하나가表示される。聾学生の筆記能力についての記述がある。RIT で筆記試験があり、その点によってレベルが決まり、ライティングクラスに入る。聾の数学の能力についても調べられ、学生の力にそって配属される RIT 内にはビジネススクールがあり、RIT とビジネススクールに入るにしても、その条件に見合った条件がなければならない。学生は、入学許可を得たら、自分の専門学部に入るが、学力レベルにあったクラスに配属されていく。学士のプログラムで入学してくる学生にはオリエンテーションがある。その時に聾学生は、特別指導の教員に会う機会がある。その時に聾学生に対して、サポートサービスについて情報を提供している。また聾学生のとるべきクラスや、卒業までに必要なプロセスについても話をする。もちろん学生によって、1 年間のスケジュールは異なる。学生のスケジュールと指導員のサービスとが、どのようにマッチするのかについても学生に話をする。たとえば、金融関係のコースが 4 つセクションがあり、どの教員が聾学生を教えることができるかを見て、私たちがそのうちの 1 つを選ぶ。そして、4 つのうちの一つを決めた場合、聾学生にそのクラスをとるように勧める。そして金融のクラスは春、冬、秋のクラスの 3

学期があり、私たちは2つの学期を選ぶかもしれない。たとえば秋と冬、そしてあとの1学期は別なクラスや先生を選ぶ。したがって私たちがどれを選ぶかは、聾にそれを伝え、聾学生がどのクラス受講をとっていけばよいかを指導している。3つの学期にそれが可能ではないかということは、NTID や RIT にいる多くの学生に対してすべて行うということは、なかなかできない。他の大学は、聾学生が3人とか4人とかで少ない人数であるからこのようなことに関して問題はない。RIT のように聾学生の多い学校は、よりパット氏やジム氏の負担が大きくなる。このようなこともあって、聾学生は、4つか5つのコースをとることになる。聾学生との話し合いの中で、コースをいくつとるかが決定される。

#### 4. 指導員と学生との関係作りについて

指導員は手紙や e-mail などによって、「私が指導員をしていますよ」と知らせ、聾学生に指導教員の元にくるように促している。また指導員も学生がくるのをまっているのではなく、学生がいるクラスに出向いていくこともある。そうすることで私たちが学生に対してしっかりしたサービスを提供していることや、またチュータの意義を示すこともやっている。チュータは、ボランティアのようなもので、学生にとって強制力はない。無理に学生は、指導員のところにくる必要はない。もし学生が、私たちのところに来た場合、私たちが提供するものは、どのような宿題がでるのかを提供したり、コースにおける試験などや模擬テストを提供したりしている。そのような提供をするが、授業内容を教えたり、指導したりすることはない。コースに出てしっかり学習する責任は学生にある。もちろん学生に問題の答えを教えたりすることはない。責任は、学生にも教員にもある、私たちにもある。学生たちは勉強する義務があり、私たちは、ルールにしたがった指導をしていかなければならない。学生の中には、異なった期待をもつ者もないことはないが、私たちが行っていることは、学生によりよい学生生活を教えるのであって、答えをすぐに求めるようなことはしない。すなわち、私たちが提供するものは、私たちが、どのようにによりよい学習能力をいかに身につけるかであり、どのように答えを出すのかは提供しない。プロセスを教えるのが機能であり、答えを出すことはしない。

レイゾンプログラムを例にとる。コースの中には、参加点数、授業中に一番多く発言をした人にはポイントを与えるシステムがある。クラス内での発言だけではなく、学生が指導員に出向くことで、ポイントをもらえるようになっている。したがって、クラス内の学生とクラス外のチュータとの意識・協力によって行っている。もちろん私たちの仕事は、ビジネススクールでクラスを指導することではない。私たちの仕事は、聾学生に情報を提供することであり、それ以外に学生たちがキャンパス内外で使える情報を提供することである。たとえば聾学生の中には、「こうしたことを知っていますか？」と答えを求めてくることがある。この時、私たちはあの先生にこうしたことを聞きましたか、他の先生に聞きましたか？など質問をして他の先生の意見を聞くように指導している。もしその学生が聞いていませんと言ったら、あの先生に聞いて来なさいと他に先生に聞くことを促したりすることを行う。難しいのは、どこでどう判断を下すかである。私たちが答えを出していい部分か、ほかところで情報が提供できるのであれば私たちは出してはいけない。そのあたりのバランスが難しい。私たちが情報を与えないかわりに、自分の力で情報を見つけることができるようにするかのバランスである。私たちは情報を提供するけれども、私た

ちをたよりにして欲しくない。学生たちの自主性に任せたい。私たちは学生をサポートしたい。しかしそれより学生たちには、より独立性、自主性を育ててほしいと思っている。そのあたりのバランスが大切である。自主性、独立心を促すというバランスがチャレンジさせる部分である。たとえば一つのクラスがあって聾の学生が一人だけ健聴学生の中にいるとすると、教員の中には自分に責任があるのではなく、サポートサービスに責任があると思ってしまう。しかしこれは実際にはそうでない。もちろん聾学生にサポートサービスをするが、実際に聾学生を教えているクラスの教員も責任がある。教員の中には、聾学生に対してどうしていいのかという質問をする教員がいる。私は、こうして聞いてくる教員に、健聴学生にはどのようにしているのかと聞く。そうすると具体的に答えてくる。そうしたら聞こえる人と同様に聾学生にも対等に接したらどうですかという提案をする。学校として健聴学生も聾学生も同じレベルで受け入れることを期待している。ただ私たちは、大切なバックアップとして聾学生をサポートするという機能をもって存在している。聾学生に対して言っていることと同様のことを、教員にもいう。教員も私たちを頼りにして欲しくない。教員には、聾学生を教えることに対して、より自主性や独自性をもってもらいたいと思っている。もちろん教員の中には、聾学生をすぐ受け入れる人もいれば、抵抗をもつ人もいる。世の中にはいろいろな人がいるからこれは仕方ない。

Q：サポート部門の使命の範囲はどこまでですか？健聴学生と聾学生の指導する範囲、ボーダはどこか

A：ポリシーや規律は、学校に規律があり、私たちが決めることはできない。情報提供に関しても情報提供できるものとできないものがある。こうしたことは、やってはいけないなどの判断は、経験にまかせてやっていることもある。なかなか難しい。聾者と健聴者との境というのも、学校側が責任をもっている。その境に判断を下すことはできない。学校とは college of business の方が境界を判断する。この人たちは NTID から college of business に派遣されてきているので、どこからどこまではどちらの仕事というまでは、この指導員たちは決めないで、このホストである college of business が決定する。すなわち NTID の決定にしたがう。もちろん健聴学生にもサービスを提供しているが、境は学校側に任せている。もちろん学生が受けるサービスは年ごとに少なくなってくる。そして教員についても同じようなことが言える。聾学生に対してはじめのうちはサービスをいろいろと情報提供をしていくが、年数や回を重ねるごとにだんだんサービスを受ける回数は少なくなっている。重要なのは、私たちが求めているのは学生たちがより自立的に独立心をもって欲しいということで、そうやって欲しいと思っている。指導員が行うことは、答えを教えることではなく、答えをどのように導きだしたらよいかということある。技術などを提供するのであって、いちいち答えを出すことなどはしない。

Q：ノートテイクはいつもで期限なく、いつでも受け入れ可能であるのか。期限がなくいつもで希望すればノートテイクを手にいれることができるのか。

A：ノートテイクの依頼は、学期の前までに申しこみが条件である。ノートテイクは自分の専門学部でなければいけない。もしくは、これまでに1回クラスをとったこと

がある科目に関してはノートテイクを依頼することができる。いつでもノートテイクを依頼することはできる。通訳は異なる。もちろん質のよいノートテイクを求めるには学期までに申し込みが必要である、

Q：学校では、ノートテイクはどれほどの時間を担当するのか。

A：ノートテイクは、上限20時間までできる。

Q：学生はどれだけノートテイクを使うことができるのか。

A：学生は依頼すれば必要なだけノートテイクをつけることができる。しかし、例えば2クラスがあり、ひとつはとらなくてもいいにもかかわらずノートテイクを使う場合がある。そうした場合、私たちがアドバイスをしてちゃんととらなければならないクラスを学生に教え、そのクラスでノートテイクをつけるようにアドバイスをする。どのクラスをとるべきかの指導をする。

Q：ノートテイクの指導を学校側の体制のもとにおいているが、ノートテイクの評価基準は州レベルか、学校レベルか。

A：条件はRIT、NTIDの中で、基準をもっている。長い歴史とこれまでの長い経験で、聾者をこれまで多く受け入れてきている。ノートテイク自身、私たちがはじめたと言っても過言ではない。質は私たちの基準は全国レベルではない。ノートテイクに関する試験などもない。けれども経験と知識は、他の学校の基準になって出ていく。

Q：ノートテイクと聾学生との相性との問題はないのか。相性が悪いと思うようなノートテイクが期待できないのではないか。これは実際どうか。

A：ミノルの例をここに出す。彼はいいノートテイクを採用した。こだわった。何回も私のところに来た。学期の始まる前にどのクラスにどのノートテイクをつけたいのかという話をした。もし気にいったノートテイクがいて、以前にそのノートテイクにノートテイクをしてもらい、いいと思ったら個人的にそのノートテイクのところに行ってお願いすることをしている学生もいる。その他、クラスを教えている先生が特定のノートテイクを選ぶということもある。これは、そのノートテイクが担当の先生の助手をしていたとか、教科に対して特別な知識があるため、先生がそのノートテイクを選ぶということがある。コーディネータが個人的に依頼することもあれば、個人的に選ぶこともできる。ノートテイクに大切なものがある。一つは質であり、ひとつは相性である。質は悪いことはない。ノートテイクと相性が悪いということもあるが、すごくうまいノートテイクもいる。相性が合わなくても質の高い人であれば、そういう人と一緒に活動することも大切である。まわりを見渡しても、相性がわるくてもいい仕事ができることもある。学生には、相性が悪くても一緒に活動することで独立性を養ったり、人間性を養ったりすることができる。あってはならないことは、質を悪くすることである。質と相性は、質の方が大切である。ミノルは、コーディネータに会っているいると相談をしてきた。

Q：学生はノートテイクについて相談をしに来るのか。

A：多くの学生が相談にくる。こうした相談にくることを私たちは望んでいる。学生がくることで、信頼関係が生まれてくる。サービスにおいては、大切なことである。質の高いものを得ようとする人は、それだけ高いものを望んでいる。

Q：聾学生の隣にノートテイクがいるのであれば、相性の問題が発生するが、ノートテイクが会う機会がなければ相性の問題はないように思えるが。人と合う、合わないというのは人種差別、民族間問題とかによって生まれるのか。

A：人種関係などはない。ノートテイクによって依頼学生の隣でノートテイクする人もいる。聾学生はノートテイクと離れて座りたければすわってもいいし、そうでなければ一緒に座ればいい。ノートテイクを見たくない人もいる。聾学生に選択権がある。よいノートテイクは、聾学生とのコミュニケーションがよい。クラスが始まる前に、聾とノートテイクが話す必要がある。それに関して質の向上のコミュニケーションが大切となる。

日本の現在のノートテイクの状況は、ノートテイクだけが唯一の通訳方法であると聞いている。日本は、聾者の隣でノートテイクをみながら行っているので、そこから相性という問題が発生するのではないかと思われる。アメリカの場合には、ノートテイクの他にいろいろなサービスがある。それだけの問題が発生しても、他の方法でカバーできる。それだけで問題となることはない。むしろ技術の方が重要である。

Q：ノートテイクが終わった後、聾学生から評価を得るということだが、その評価の内容や方法はどうなっているのか。

A：学期の4～5週後目に聾学生にノートテイクに関する評価表が送られてくる。評価表はノートテイクに渡されて、その評価表を聾学生に渡さなければならない。その質問の最初には、たとえば聾学生に自分がノートテイクであると自己紹介をしたかがある。ノートテイクについて他の質問に関して行われる。ノートテイクについてしっかりした情報があるか、ノートテイクがどのようにしたら質が上がるかの質問もある。評価表をもらったならノートテイクはその質問表をもって私のところ（コーディネータ）のところにくる。そして受け取った質問を見ながら、コーディネータとノートテイクと話し合いを行う。新しくきたノートテイクであれば、試用期間のノートテイクに問題があればノートテイクをかえることができる。

4～5週目の後は多くのノートテイクが私のところにくる。

クラスで教えている先生は、オンラインでどのようにノートテイクが行われているのかをみることができる。そのノートをみていて変えなければならないものがあれば私のところに連絡して内容を変えたりできる。これがコンピュータをつかって印刷したノートである。

Q：現在正規のクラスをいくつ担当しているのか。担当している聾学生の人数はどれほどか。

A：5～6つのクラスで、その中に2～6人の聾学生がいる。一つのクラスには13人もいる。教えているのは1クラスだけである。

Q：教えている教員は、オンライン上の情報をチェックする必要があるか

A：必ずしもアクセスする必要はない。多くの教員はアクセスをし、自分がどのように学生がノートをとっているのかを見たり、授業内容を確認したりするためにアクセスする教員も多い。アクセスしない教員もいる。

ノートテイクには賞がある。一番いいノートテイクをした人には卒業式のときに賞を与える。教員の中にはノートテイクの書いたものをもとにして、次の授業を計画する人もいる。ノートテイクが作ったものを学生全員に配布した例もある。アクセスできるのはすべての学生ではない。アクセスできるのは聾学生だけである。前学期にあった例として、ノートテイクした内容を学生に配布した。教師はアクセスする権限があり、印刷して配布してもかまわない。

いま3つの異なったノートテイクの例を示したが、クラスによって書き方や要約の書き方が違う。ノートテイクによって書き方がすべて異なる。これが正しいというノートテイクの書き方はない。ノートテイクのスタイルがあり、そのスタイルを続けることで、ノートテイクを受ける聾学生もよい情報を得ることができるようになる。クラスや講義の内容によって、ノートテイクの仕方が異なる。例えば、このクラスはノートテイクにコンピュータを使ってはいけないということもあり、この場合は手書きである。

Q：ノートテイクトレーニングをして、そのノートテイクがいい評価でなければ、質の向上を期待できるトレーニングプログラムはあるのか。

A：コーディネータとノートテイクとの間で、1対1で対応を図るようにしている。ノートテイクのトレーニングのためのクラスはない。

#### ノートテイクについて

10年前は教師がノートテイクをしていた。またノートテイクサービスが10年前に始められた。そしてトレーニングの質の向上は、一人ひとりにコーディネータが話をしたりしている。(20年前には教職員がコーディネータを自ら担当していた。しかし10年前に専属のコーディネータがつくようになって、そこからノートテイクとコーディネータがコミュニケーションする中できちんとノートテイクの方法を教えたり、何が問題であるかを話あったりして質の向上に結びつけてきた)

Q：スキルアップの指導があると聞いた。ノートテイクが技術的に足りないから、指導してくれということで指導が得られるのか。

A：1対1で面接の中で、技術の向上はその時に話される。トレーニングというものはない。